



書道研究藍笥会 常任理事
読売女流書法展 理事
九州かな書道会 常任理事
本浪 静枝さん

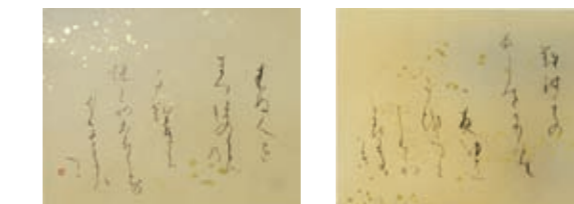
基礎を学ぶ
古筆の手本。

手書きの字が表すもの

「書道研究藍笥会」の常任理事をはじめ、多くの書道団体の理事や幹事を務める本浪静枝さん(上野)。昭和50年代当時、浩宮徳仁親王(現皇太子)のご進講役(書の講義)をしていた今関脩竹先生に師事し、かな書道を専門的に学びました。昭和57年には、2度目の出品で「日展」に初入選。以後、今までに8回の入選を果たしています。

「指導する時にわたしがよく言うのが『上手に書くことと思わなくていい、丁寧な字に書けばいい』ということ。文字には、書き手の気持ちや個性が表れます。だから上手か下手かではなく、きちんと書くという気持ちで込められているかどうかを見たいです」と本浪さん。

なく、絵や茶道、何にでも共通して言えますが、基本は「気持ち」を込めて表現するということなんです」と、本浪さんは断言します。



↑ 昨年4月「読売女流書法展」に出展された百人一首の和歌を書いた作品。数々の展覧会に年10回以上出品しています。

書き手の気持ちが見られる字は、「丁寧」に書くことが一番大切。

地域の子どもをばぐくむ

「この町で書道を教えて30年以上。教え子が立派な大人になり、自分の子を連れてくるのがよくあるんですよ」と笑顔を見せる山崎菊一さん(弁城)は、現在81歳。今も町内の子どもから大人までに書道を教えている現役師範です。

「最初は、自分の子どもと一緒に、地域の子どもたちの精神面がはぐくめたい」という気持ちでしたが、1か月後、予想以上の反響があつて、保護者が「月

謝を払うから続けてほしい」と言ってきたのです。わたしは、独学だった書道を基礎から勉強し直し、浪曲を辞めて本格的に書道教室を始めました。



この町の未来を担う子どもたち、書道をとおして心をはぐくみたい。

と、あたたかいまなざしを送りました。

▶ 「方城書育」は、週4回、方城地区の隣保館事業として行われています。
↓ 山崎さんが書いた字が刻まれた福専寺の山号寺号の石碑。



日本教育書道研究会
「方城書育」支部長
福智町文化連盟副会長

書家
山崎 菊一さん

特集
「書く」
道徳を伝える

